

臨床医のための症例プレゼンテーション AtoZ [英語 CD 付]

齋藤中哉 著

Alan T. Lefor 編集協力

＜書評者＞ 岸田明博（手稲溪仁会病院外科・臨床研修部部長）

新医師臨床研究制度が発足して5年目を迎えています。マッチングをはじめその制度は定着し、また、その研修指導者を養成する講座や研修会が各地で盛んに開催されています。そのような講習会でよく出てくる質問のひとつに、「1か月や2か月ごとに回ってくる研修医に何を教えたらいのか」というものがあります。医師の研修に無頓着であった日本医学界の実情からすれば、それは至極当然な質問だと思います。正直なところ、大学などでの卒後研修の実情を知らなかった私自身も当初は明確な答えを持ち合わせていませんでした。

しかしながら、日本の医療現場の実情を知るにつけ、その答えは次第に明らかなものとなってきました。

初期研修で何を教えたらいのか？ 答えは“コミュニケーションスキル（communication skill：CS）の習得”です。ここでいう com-

munication とは医療に関係しているすべての職種の方々との意思疎通を意味していますが、とりわけ患者さんや医師、看護師が重要な対象となります。研修医の視点からすれば、なかでも医師、特に指導医との communication は厄介なことの上ありません。卒前教育ではほとんど教えられていない分野であり、専門用語やその使い回しをはじめ、何をどのように組み立てて話していけばいいのか、戸惑うはずです。

医師といっても、専門が異なるとそこで使用される専門用語やその用法、そして疾患へのアプローチや必要とされる情報に大きな違いがあります。われわれ医師はややもすれば手術や検査など、手技の習得に関心が向いてしまいますが、まず最初に覚えなければならぬものは CS に他ならないといっても過言ではありません。

それではどのようにしたら CS を身につけられるのか？ CS は

いいかえればプレゼンテーション（presentation）のことであり、CS を習得するということは上手なプレゼンテーションをすることにほかなりません。聴いている人が容易に理解できる、的を射た簡潔なプレゼンテーションを、時間や場所、状況に応じて、かつ各科別の特性にも配慮しながら実行することは、指導医といえども決して簡単なことではありません。

また、プレゼンテーションは、指導医の視点からみたもう1つの効能を持ち合わせています。プレゼンテーションを聞くことによって、その発表者の技量がおおむね評価できることです。最初はしどろもどろで話していた研修医が、いつのまにか威風堂々との確にプレゼンテーションするように変身していきます。

人前でしゃべることの苦手な日本人医師、そして医師にとって必須であるはずの英語が苦手な日本人医師にとっても、本書は大きな助けになるものと確信しています。

●B5 頁248 2008年
定価 3,990 円
(本体 3,800 円+税 5%)
[ISBN978-4-260-00278-3]
医学書院 刊